

しかし、昭和二十六年、名護屋村は真珠の養殖へと方向転換を試みました。真珠景気の波にのって、肥育牛の生産は中止となりました。現在波多津部落に、役牛を兼ねた肥育牛が十頭位残っているのみです。

その後、真珠の不況となりましたが、肥育牛の生産は復活していません。

住民の出稼が等によって、経済状態の難符を留めてい

るようですが、その移り変わりには、ただ驚くばかりです。  
規模拡大などで行き詰まっている畜産農家に代わって、県が土地を取得して牧場造成などを行ない、希望者に牧場を安く売り渡すという公社牧場制度が、昭和四十七年度から始められました。

すでに、大野郡千歳村と、東国東郡安岐町とが、事業実施地区となっています。

千歳村の牧場規模は十ヘクタール、乳牛五十頭、安岐町が十二ヘクタール、乳牛五十頭で、共に規模は中々ラ

スで、二年間継続事業となっています。すでに單年度ではほとんど事業は完成し、昭和四十八年度は取り付け道路を残すだけになっています。

一方、安岐町は、取り付け道路の整備は終わり、牧場造成と畜舎建設を急いでいます。  
県農地開発公社では「国に事業ワフの拡大も要求したいし、昭和四十九年度からは、希望市町村を組織的に整備し、公社牧場の波及効果が地元で適正に出るよう指導していきたい。」と計画しています。

集団で酪農経営に取り組み、飼料対策などに成果をおげている佐伯市女島酪農団地振興組合は、第五回昭和四十八年度大分県農業賞(優秀賞)を獲得しています。(終)

紀行

再び伊豆路に

—同志と柑橘視察の旅で—

—海江町、会員 富 澤 泰

(一) 静岡県柑橘試験場伊豆分場にて

昨年の五月、私は伊豆の旅行の途次、独りでこの試験場を訪れたことがあるが、今度の再訪は、四月二十五日、ふかん農氏の危機突破の全国集会在東京で開かれ、それに出席した県内の農協代表者柑橘研究会(生産者団体)の代表等が、如何にして年々過剩の低価格温州みかんの苦境から脱出するかの具体的な事例として、適地適作の難村は何きとりあげるべきか、という課題のもとに、志を同じうする人々二十数名の一行の中の一人となつたわけである。

昨夜宿った熱海のホテルでは、遅くついで一夜は温泉情緒どころでなく、夜行列車、集会、そして今日の早朝出発にそなえて寝るだけが惜一ぱいであった。それでもホテルの魚の新鮮さは海の国伊豆、山菜の豊富さは山の国伊豆の味を、充分に腹を満たしてくれた。

試験場は貸切バスで直行二時間近く、温泉の街伊東よりさらに南下、稲取の駅上数分、稲取高枝上にある標高百二十坪、東伊豆より南伊豆に延ぶ海岸線への遠望は、きき、伊豆大島を海上遙かに絶景の地だが、小雨のばらつく今日は、島の姿は現れ望まない。試験地は四ヘクタールの敷地の中に、二五ヘクタールの圃場をかまえて、晩生柑橘の栽培試験、並びに貯蔵試験。愛媛と覇を争う静岡

岡県だけに、内容の充実さは、技術者から講義をきき、あるいは試験地參觀の中で、充分伺うことができた。

年明け販売、特に二、三、四月と、西南暖地の瀬戸内海  
の海岸、九州等の温州地帯よりおくれて出荷する有利な  
静岡でありながら、既に昭和四十年稚柑試験場として、  
充実したスタートをしている。大分県の柑橘行政は如何  
ここにいうまでもなく、その差の甚だしきを今更に見せ  
つけられ、心中期するものがあつた。

駿河湾に直面し、夏の台風、冬の季節風と、この岡を  
容赦なくおそうだろうが、反面気温の状態が好適な試験  
地だが、この風害に対し各種の防風樹を試験して管理  
され、その中に守られた晩生雑柑の各品種系統は、行き  
届いた栽培試験が行なわれている。

充分に見学が終つて玄関前に立つと、フェニックスを  
主木として、伊豆になじみ深い山椿がその間を点綴し、  
地表に紅・白・紫等とつづじが今を盛りと咲きほこり、そ  
れはまるで小さな公園として見事に設計されている。

私達はこの前庭で記念撮影をすませ、オレンジ色の東  
海バスに搭乗した。岡から下る道路ぞいには、まだ日向  
夏(ニューサンマーオレンジ)が、延びはじめた新芽の中に黄色  
く熟れているが、採収は今からだ。試験場の技術者は語  
つていた。話しにはきいていたオレンジ日向(日向夏の  
芽条変異)にはおこがれていただけに、その栽培の状  
態を又満足感にみちた身を、うへりゆく絶妙な海の変  
化に目をやりながら、次の町河津浜の松並木を思い浮か  
べた。

(二) 天城を越えて

伊豆は遠い昔律令制度が定められた頃、重罪人の流刑  
の地だつたという。流罪人に最もふさわしく、海陸とも

に人も船も、出入りをこぼむ土地であつた。したがつて  
ここには、古代文化の花は咲かず、源平争乱の昔、頼朝  
が長岡の蛭ヶ小島に配流されたことによつて、後年の歴  
史に大きく登場して来たといえよう。その頼朝も伊東祐  
親の娘八重姫との悲恋、また後の尼將軍といわれた北條  
政子との恋も、修善寺物語の主人公頼朝の子將軍頼家の  
死、歌人として後代に「金槐集」と残した実朝、それら  
は源氏一門の大きな歴史ドラマ、更にあるいは、富士の  
裾野の曾我兄弟の仇討など、皆源氏にわがりの物語りで  
ある。

伊豆はまた幕末近世史の終りに近く、日本の黎明期に  
登場する重要な拠点ともなる。その伊豆半島を、古伊豆  
の河津の今井浜から北上し、天城峠を越えて三島への道  
をたどり、私達の東は河津川を溯行しようとしている。

無霜地帯を利用して、水田に栽培された苧蒲の花が、  
五月の端午の節

句を前に、紫の  
つばみを見せて  
いる。そして狭  
い段々畑には、  
夏橙がまだ枝に  
残されている。

私土その一人  
かも知れないが  
農民の投機的無  
能というが、ま  
た逆に定着性の  
ねばさというか  
あまり金にもな  
らないこの夏橙



を、有利な他の雑柑に更新してない。すぐ隣の箱取には  
優秀な試験場があるというのには……。

海岸近くからすぐ次々と温泉が続く。伊豆とは「出湯」  
からきているといわれる。それだけに伊豆には四十近くの  
温泉がある。

車が湯ヶ野温泉に到着するのは極く僅かの時間で、川  
端康成の「伊豆の踊子」の舞台となった天城峠にかかる。  
踊子達の一行は私達とは逆に、北の口伊豆―奥伊豆―峠  
―湯ヶ野―下田港と、この街道を通ったのである。

湯ヶ野温泉の福田旅館に、川端康成は若き一高の学生  
として泊った。その宿は現存し、隣地に文学記念碑があ  
るが、そこは私の曾祖の地である。車は眼下にそれらを  
遠くみて、新緑の天城の山々を物珍らしく、一行はみか  
ん藪氏の苦悩を忘れて、今日はただ無心によろこぶ旅人  
である。

ガイド嬢は懇切に語り、歌いつづけて行く。狩野川は  
さして大河ではないが麓が多い。河津大瀧といわれてい  
る。ここでは麓のことをタルという。

昔、天城山中のハ丁池にすむハ丁の頭をもつ大蛇に、  
ハ丁の酒樽の酒を飲ませ、万三郎がこれを退治したとい  
う伝説から、この付近の麓はタルと呼ばれるようになった  
たという。大蛇退治の万三郎の名をとつた万三郎山（二四  
〇。M）が、伊豆連山中の最高峰である。

原生林の溪間と「大瀧」が眼下に見える。点々と伊豆  
特有のワサビ畑が川沿いに見え出したが、まだその数は  
少ない。ガイド嬢はこの山の観光道路が充分に整備され  
てないのを、わがことの如く弁解しながらも、「伊豆の  
踊子」の一節を、詩の朗読のように語り続ける。

河津から一時間、新しい天城トンネルは近い。  
「道はつづら折りになつて、いよいよ天城峠に近づい

たと思う頃、両脚が杉の原生林を白く染めながら、す  
さまじい早さで麓から私を追つて来た。」

今車を通っているトンネルの上の古い峠道を、一高の制  
帽をかぶり、紺飛びの着物の袴に朴葉の下駄で、踊り子  
の一行と峠の茶屋でふれあつた。若き日の川端康成への  
追憶は、旅行く人についてまでもいつまでも生きて行くこ  
とである。天城峠に、今も伊豆の踊子と学生は立派に  
生きている。文学の永遠さを、この旅は深く心に刻み  
けて行く。

トンネルを越すと、山の傾斜はゆるくなつて行き、同  
時に折り重なる山中が広がり長い。樺や桐の原生林の  
巨木が目につき、杉・松の造林地も広がって、雑木林と  
針葉樹林の黒さが印象的で、山国伊豆の威が深い。  
（カ）

そういえばこの山は猪の産地だといふ。佐伯に近い  
中山峠にも猪料理の看板はあるが、それはこの峠路の比  
ではない。猪が飼いならされて、曲芸のまねごとをする遊  
園地すらある程である。

杉・桐など椎茸の原木の林相は広く、道ばたの杉林に  
椎茸のびた場がこれまた多い。佐伯人の私にとつては、  
何か近い親類のような身近さを感じた。友が、ただ  
一つ極端に異なるものがある。それはこの溪谷の両側共  
に、今我盛りであるはずの藤がほとんど目につかないこ  
とである。佐伯の峠路と思いくらべて、何故こうも植生  
が異なるのだらうか。

天城峠から北に向かう川の流ればゆるやかに、その名  
を狩野川という。水量も河津川よりはるかに豊かである。  
その豊かな水を谷の両側に引いて、ワサビ畑が流れの下  
るにそつて、随分と広く経営されている。ワサビは豊富  
な冷水が必要で、この地は日本での特産地で、そのワサビ  
は幽深い溪間の樹林の合間から、青い葉のひろがり

見せている。ワサビの芽を川がにがよく好むというが、これに對する備えはある土のと思える。

トンネルを出て三十分ばかりで、淨蓮の瀧がある。バスの広い駐車場に車を止めて昼食、瀧への道はけわしいが、コンクリートの段と鉄柵をつたって百五十坪ほど下る。屏風のようにつき立った玄武岩にかかる瀧は、高さ五十坪ぐらいか、天城山中第一の瀧である。付近はうっそうたる樹木に囲まれ、昼をお暗い中に一条の大瀧の落下するさまは幽すい、極地である。この瀧に、若山牧水の歌が残されている。

踏又わたる石のかしらの冷やかさ身にしを瀧々に

河鹿なくなり

岩かげに立ちてわが釣る淵の上に桜ひまなく散りておるなり

「隔り子茶屋」が私たちが昼食場、山小屋風の建て物杉の柱は皮つきのまま、壁・窓・天井と俗化されたドライブインの中で、心利いた運転手とガイド嬢は、この茶屋を迷んで予約してくれていた。民芸風の食器・酒器、これは栃木県の益子焼だという。盛られた山菜料理の味も、ひなびて口珍らしい。ここで自慢の、自家製豆腐をうすく切つて椎茸をあしらひ、甘口のタレでの味あい、酒に不得手な私の口には、この旅で一番忘れられない味となった。心憎いほどの茶屋主人の接待にひかれて、名物ワサビ漬を買いこんだのは、私一人ではなかつた。しかし、いつの日再びこの地を訪れることがあるであらうか。「会者定離」、その記念にと「隔り子記念像」の前で、年甲斐もなく記念のシヤッターを、果柑橋研究会長T氏におしてもらつた。

狩野川の下流ぞいに、湯ヶ島、吉奈、嵯峨、船原、月

ヶ瀬と、数多くの温泉が、農村風景の中に点在している。湯ヶ島も康成が天城越えに一夜を過したところというが、ここは作家井上靖の郷里だと説明されて、「しろばんば」などこの地の風土、人物を背景に、多くの作品が書かれていた。映画化された「氷壁」は、多くの人の目にとまっていることだろう。

修禪寺は国道から左に車で十分余という。寄らざるは長岡へ。このあたりは峠風景と異なり、近代的な町となつてゐる。

頼朝が流された蛭ヶ島は駅から五十料、今は僅かな茨みのみという。幕末に登場する並山代官、反射燈の所在もマイクで聞き流し、一路三島の東名高速道路のインター千エッジを指す。なだらかな丘陵には茶畑が展開される。

静岡はみかんと茶の王国である。茶一みの管笠はいまの静岡の農村風景にはないのだらうか。まだ私達の行程はかた残り残されてゐる。三島一沼津一興津、そしてそこにある農林省興津村橋試験場。東名高速は一〇〇キロ、高幹線は二〇〇キロの起スピードだが、ここではスピード感がない。(中略)

千ヤツキリ節本場の茶畑、まるで刈り込まれて新芽は伸びざかり、旬日の後には茶つみともなる。

霊峯富士にここ日本平、一幅の名画風景のはずのとこそ、厚い雲のかさなりには望むべくもない。登山遺跡の古代人住居址もこの旅では心を残すだけ。

やかてせまるたそがれ、遠ざかつてしまつた天城の山は、もう夕やみに一つまれているだらう。

ほの赤う湯宿の軒の灯ともされて夕べの霧の天城よりくる  
(静美人知らず)  
(おわり)